

# あやとり巨人旅行記

——受賞作品概要

稲葉祥子

金を稼ぐためというノユリに説得され、親友のノミが止めるのも聞かず、南の国へと出かけて行く。ノミは女に愛されようとして本来の自分を失っていく巨人の不甲斐なさを嘆く。

東の国に住む巨人のただ一つの楽しみは電線であやとりをすることである。おかげで町は停電に陥り、人々は大迷惑を被っているのだが、誰も面と向かつては言えず陰で悪口を言うばかり。ワープロで仕事中のノユリが文句を言ったところ、巨人に見初められて野原に連れ去られる。みなが恐れる巨人だが、愛するノユリには従順であり、夫との関係が悪くなっているノユリも逃げだそうとせず、野原での二人の暮らしが始まる。

ある日、敷物売りがノユリの夫から託された離婚届を持って現れた。ほかの女性との間に子供ができたので別れてほしいと言う。ショックを受けるノユリに敷物売りは、巨人は西の国から来た流れ者だろうと言う。西の国は以前「恐ろしい

こと」が起こって想像を絶する事態に陥っているという噂が世界中に広まっており、西の国出身というのは差別の対象となっている。ただし、西の国は他国と一切の関係を断って渡航が厳禁されているため実情はわからない。桜の頃、ノユリと巨人は桜渡りを始める。桜をたどって歩くという遊びで、ノユリが子供の頃、弟とした遊びだ。大人になって自殺した弟のことを思い出しながら、ノユリは巨人と百本になるまで桜を数えて歩く。夜になって野原に戻ってみると、小屋のドアの前で若い男が待っていた。

男は南の国の映画会社の社員でシモンと言い、巨人をガリバー役にスカウトするために来たのである。巨人は生活する

女達から西の国の惨状を聞く。西の国の

聖山からガスが吹き出、それを浴びたシロハナの花粉が人々の体を蝕んでいる。女達もそれぞれに病に冒されており、切々と語る言葉にノユリは飲み込まれていく。女達は巨人こそが救世主だと思議なことを言う。聖山のそばに住んでいる「森の女」は巨人の母親に違いない、森の女は聖山からメンエキを与えられているため、シロハナの被害を受けない。巨人もそうだというのだ。

葉が効きすぎてなかなか目覚めない巨人を、怪力ひ孫ノミがまぶたを持ち上げて目覚めさせるが、ノミを嫌うノユリにつぶされてしまう。

西の国に近づいたところで巨人は下ろされ、ミハウとノユリは小舟に移されて、乗ってきた船はきびすを返す。西の国を脱出したい人々を乗せた夥しい数の小舟がこちらへ向かつて来たからだ。ミハウは人々に「救世主がいらっしゃったぞ」と告げる。巨人は国を挙げて迎えられ、崇拜される。ここでは人々は白い防護服にマスクで身を守り、解毒剤を持ち歩く。

「カス」をしながら国中を巡る。巨人が電線であやとりをし、その中でノユリが曲芸をするもので、ノユリは元バレリーナの自負と、贖罪のため完璧なサーカスをめざして巨人にも厳しく練習させる。巡礼のような興行がなんとか軌道に乗ってきた頃、二人に危機が訪れる。ノユリと巨人を追いかける「週刊絶対真実」の記者が現れたのだ。ちょうど見物に来たノミ一族とも別れ、二人は敷物売りが配るチラシにある北の国へと逃げる。

北の国の伐採現場で二人は新しい仕事を獲得。巨人は木こり、ノユリは賄い婦である。社長のトメさんはそれまで自ら木こり達の食事の世話をしていたが、ノユリに仕事を任せてスキージャンプに入れ込む。息子の副社長はケチで有名で、巨人の食費をしつかり給料から引くことを忘れない。労働者の中には様々な肌の男達があり、その中の白い男達のリーダー、ミハウは何かと巨人によくしてくれる。赤毛のポンやおじいさんのタナカさんなど、仲間ができる。過酷な自然と労働の中で、巨人もノユリも北の国を心落

ち着く場と感じ始める。ある日、トメさん発案の伐採コンテスタで巨人が優勝し、百万ツラの賞金を得る。が、寝ている間に金庫から盗まれてしまい、ミハウの一団と巨人とノユリは行方不明になったポンを追う。山を越え、海へ出る手前の白い男達の村までたどり着き、そこでミハウの妻イスラと娘のルルに会う。そこは病気の者が多く、ルルも病気である。ミハウに従って、ノユリは港に停泊中の船に乗り込んだ。巨人はなぜか船の甲板にいた副社長にそそのかされ、甲板に乗ったところ、葉を飲まされて眠り込む。

みなを乗せた船は出航し、巨人の髪は毛に隠れていたノミのひ孫（ひ孫ノミ）はひどく驚く。副社長、ミハウ、ポンはぐるである。ポンは恋人に渡す金のため計画に参加し、巨人の賞金の一部をもらって故郷の島へ帰っていく。副社長はトメさんがばらまく金を取り戻したい一心で船を提供した。

船は一路、白い男達のルートである西の国を目指す。長い船旅の間、ノユリは

体内のシロハナ蓄積濃度が高まると、危険な状態になる。ノユリも防護服を着用するが、巨人は何の防衛もせず被害を受けない。ノユリは巨人に言う。巨人が聖山に登り、ガスの吹き出る噴火口に特殊な金属を流し込んで蓋をしてほしい。それから、聖山のふもとには巨人のお母さんがいるそうだ。巨人にとっては不思議な話だ。

二人はミハウとともに聖山を目指すのだが、次第にミハウの苦難の人生が明らかになっていく。悪名高い聖山孤児院で少年時代を過ごし、危険な仕事で貯めた金で密航したことなど。

途中、巨人は熱狂的な人々に取り囲まれ、その中にノユリは自分たちを追いかける記者の姿を認めた。ノユリが思わず放った「あの男は救世主の敵」という言葉に反応した群衆が記者に襲いかかり、記者はマスクをはぎ取られ、あつという間にシロハナに覆われて死んでしまう。その後、シロハナ死体処理班の車が駆けつけ、鉛の棺桶に死体を納め、聖山の方へ運んでいく。ノユリら一行はその後に

従って進む。聖山のふもとに到着するとシロハナ死を遂げた者の墓場があり、赤い防護服に身を包んだ墓男達が棺を運んでいた。

ノユリはその中にシモンの姿を見つけ、驚愕する。墓男長の言葉によると、シモンはマリアと小舟で漂流していたところを助けられた。マリアは船乗りと消え、シモンはドキュメンタリーを撮るために西の国に潜入したらしい。しかし、シロハナ花粉に侵されたシモンは記憶がすぐ消えてしまい、挙げ句周囲にばかにされている。その姿に哀れを感じたノユリは覚悟を決める。

聖山のすぐそばに、森の女が住んでいた。女は娘の頃より山を恋人のように愛し、結界の縄を越えて歩き回るのを常としていた。女は男の子を産み育てていたが、噴火がおこり、シロハナによる被害が出たので、男の子を首都に避難させ、自分は残った。それから、数十年、すっかり年を取った女のところへ、訪ねてくる者がいた。声を聞いただけで、女にはそれが自分の息子だとわかる。

巨人は聖山に登り、自分の形の穴に体を埋める。森の女は自分のお母さんではなく、ミハウのお母さんだった。メンエキ者であることがわかったミハウは長老に選ばれた。巨人はミハウに言われたとおり、ここで眠って、いい蓋になろうと思う。なかなか眠れないからあやとりでもしようかと思ったら、体を登ってくる者がいる。ノユリだ。「あたし達、メオトでしょう」結界の縄でこしらえた輪の中で防護服を脱ぎ捨てたノユリがサーカスをする。やがて、ノユリはシロハナに覆われて死んでしまう。

月日が流れ、巨人は完全に聖山の一部となり、シロハナ汚染は消えている。今では人々は安心して山に登り、ノユリがいつも入っていた巨人のシャツのポケットのあたりには、ユリの花が咲いている。